

7/12 (木) Meet the New World ～途上国から世界に通用するブランドをつくる～

- 日時 平成30年7月12日(木) 16:00～17:00
- 演題 Meet the New World～途上国から世界に通用するブランドをつくる～
- 講師 株式会社マザーハウス 白神綾菜氏(参加生徒人数 33名)

7月12日、SGH 第2回オムニバス授業として株式会社マザーハウスの白神綾菜さんに「Meet the New World ～途上国から世界に通用するブランドをつくる～」というタイトルでご講演を頂きました。「途上国から世界に通用するブランドをつくる」という、発展途上国からビジネスを始める思いについて講義をいただき、海外への興味関心や、働くということについて深く考える良い機会になりました。

【ご講義の内容】

【白神綾菜さん プロフィール】

マザーハウスみなとみらい東急スクエア店 店長
筑波大学第三学群国際総合学類卒業後、青年海外協力隊としてペナン共和国へ赴任。2年間の活動を終え帰国し、株式会社マザーハウス入社。横浜ベイクォーター店店長を経て、現在みなとみらい東急スクエア店店長として勤務中。



■ 株式会社マザーハウスとは

- 発展途上国のそれぞれの国や地域にある、オリジナルな素材を見つけ出し、現地の人々の技術で先進国をはじめとする世界各国に、魅力的な商品を発信しているブランド。
- 途上国の現状を変えるのは援助でも国際機関でもなく、持続的な経済活動。そのために、本当にお客様が満足して頂けるもの作りを途上国で行う、という信念のもと事業を展開している。

■ 創業者(山口絵理子氏)の起業までの道のり

- 国際機関のインターンの際に、援助されている発展途上国の人々の現場が見えてこない点に疑問を感じ、発展途上国を自分の目で見る。
- 援助や寄付が必ずしも求める人々の手に届いていないということを実感する。途上国に腰をすえて自分にできることを探そうと決意し、シュートに出会う。
- シュートという途上国にある資源を使い、先進国でも通用する魅力的な商品を世界に輸出することで、発展途上国の可能性を世界に発信できないか、という思いで創業。

■ 株式会社マザーハウスが大切にしていること

- 各国特有の素材、技術
 - バングラデシュのシュートやレザー。ネパールの草木染や上質なかシミア、シルク。インドネシアのフィリグリーやパティック。インドの高い技術でできている綿糸。すべて現地を歩き、直接見聞きして探す。
- 第二の家としての役割
 - 「いいモノを作る」ために、働く環境を整えることに重点を置いている。
 - 給与水準の高さやスキルに合ったポジションの昇級、企業ローンだけでなく、ランチタイムの充実など、働くみんなが「第二の家」のように感じられる工場を目指している。

■ これから社会に出る皆さんへ

- 可能性の追求を意識し、もっとできるのではないかとこの思いを大切にしてほしい。フィリグリーもシルバーのみで使われていた技術を、扱いの難しい金の加工を可能にしたことで、より魅力的な商品となった。向上心を持つことで成長できる。
- 何かを始めるのは難しいが、続けるのはもっと難しい。創業から13年がたち、世界に30店舗以上を展開しているが、その陰では様々な困難に遭遇してきた。それらと向き合い前向きに進み、新しい国を探したり、現地の人々を理解し信頼関係を築けるかを考えたりして過ごしている。皆さんにもKeep Walkingをテーマに奮闘してほしい。

【生徒からの質問】

- なぜ発展途上国で作ったものを現地で販売するのではなく、日本や世界で販売しようと思ったのか？
 - 発展途上国と先進国というように価値観が完全に切り分けられている、世の中の仕組みを超えていきたいという思いがあり、同じ地球人として付き合っていきたいとの考えから世界で展開している。
- 現地の工場は、スタート当初と現在ではどんな変化があったか？
 - 創業時は騙されたり、お金の持ち逃げなど困難があった。このような障害にもめげず事業を進めてきた結果、現在では工場働く人自ら、工場を続けていくために自主的に業務にあたり、仕事を支える存在となっている。
- 女性職人や女性の力をどう考えているか？
 - ネパールの例では、男性が海外に出稼ぎをすることが多いため女性が働き手になり生活を支えている。家庭を大切にしながら、女性の役割を全うし、社会貢献もできるという点は日本でも参考になるのではないかと。

(講師の白神さんと、丸ビル店店長の高地亜季さんにお答えいただきました)